

- wave disturbances propagating over the equatorial Pacific. *J. Meteor. Soc. Japan*, **44**, 291-294.
- , and T. Nitta, 1967: Computation of vertical motion and vorticity budget in a Caribbean easterly wave. *J. Meteor. Soc. Japan*, **45**, 444-466.
- , —, T. Nitta and Y. Hayashi, 1968: Power spectra of large-scale disturbances over the tropical Pacific. *J. Meteor. Soc. Japan*, **46**, 308-323.
- , and Y. Hayashi, 1969: Large-scale equatorial waves penetrating from the upper troposphere into the lower stratosphere. *J. Meteor. Soc. Japan*, **47**, 167-182.
- , and M. Murakami, 1970a: A further study of tropical wave disturbances by the use of spectrum analysis. *J. Meteor. Soc. Japan*, **48**, 186-197.
- , S. Esbensen, and J.-H. Chu, 1973: Determination of bulk properties of tropical cloud clusters from large-scale heat and moisture budgets. *J. Atmos. Sci.*, **30**, 611-627.



地球の物理—現代の地球観—

日本物理学会編, 1974, 丸善, 348 pp. ¥3,000

今から十数年前, 私が学部学生であった頃の地球物理学学科では, 坪井・日高・本多・正野・永田各教授といった錚々たる碩学の講義が並び, 文字どおり地球物理学を学ぶという雰囲気^{はうきふつ}に満ちみちていた。然るにその後は地球物理学各分野の急速な進歩に伴う領域の細分化・専門化が著しく, 学部や大学院のカリキュラムも変貌し, 同じ地球物理学教室内のスタッフ同志の間でさえ, 隣りは何をする人ぞといった傾向が見られるようになってしまった。他分野からの情報は僅かに限られた個人的な会話とか, 通俗科学雑誌, 時には新聞・テレビといった貧弱な伝達手段のみによってかろうじて得られる程度である。気象学という狭い枠の中でさえ, 学会発表の場に見られるように, テーマの枝わかればかりが目立ち, ともしれば木を見て森を見ずの専門バカを作る風潮がなくな

ない。しかしながら, 気象学を含めて地球物理学とは, 結局のところ地球というひとつの惑星のさまざまな側面を物理学の立場からながめてゆくことであり, どの部分を調べるにせよそこには常に共通の見方が存在していることを忘れてはなるまい。その意味で, ここに紹介するのは地球物理学とは何であるかをもう一度想い起こさせてくれる良書と言えよう。

本書は1972年7月に日本物理学会の主催で“現代の地球観”の名のもとに行われた講習会の内容を基礎にして, 各専門領域の第一線の研究者が最近の地球科学の発展ぶりを他分野の人々に理解出来るよう考慮してまとめたものである。第1章, 坪井忠二先生の“地球序説”は当時の東大地球物理学教室の雰囲気^{はうきふつ}を彷彿とさせる好エッセイで, 以下の各章は, 2. 宇宙・月・地球, 3. 大気と水圏, 4. 地球の内部, 5. 地球の磁気, 6. 実験室内の地球, 7. 海洋底の物理, 8. 弧状列島, 9. プレートテクトニクスと火山観, 10. 新しい地震観, 11. 地震の予知, と続く。最新的话题を多く集めているにも拘らず, それらがいずれも先鋭的な専門化に走らず,むしろ地球科学としての共通の問題意識を明確に打ち出し総合化の方向を旨としている点は注目し値しよう。我々に最も馴染みのあるはずの第3章“大気と水圏”についてみても, 従来の常識的な気象学の教科書には殆ど見られない“惑星としての地球”の見地から書かれた, 熱機関としての大循環論, 相変化に着目した物理気象, 大気組成と生物の進化等々, 執筆者駒林誠氏ならではのユニークな話題が知的好奇心を大いにゆきさぶる。

このような高度の啓蒙書が物理学会によって企画出版されたことについては, 改めてそのキャパシティの大きさに感心するとともに, 翻ってこれまでの地球物理学関係者相互間の交流不足を反省せねばなるまい。

巻末の文献リストや地球物理定数表の付録等に教科書としての配慮も行き届いており, 学部・大学院の学生にはもちろんのこと, 講義を聴くことから遠ざかっている世代の方々にもひろくおすすめする。

(廣田 勇)